

目 次

I	提案趣旨	1
II	提案内容	1
	1 実践の概要	
	(1) 本校の実態と課題	
	2 実践内容	
	(1) 学びに向かう集団（学級）づくりの工夫	
	(2) 子どもが意欲的に取り組む授業づくり教室環境づくりの工夫 (≡ユニバーサルデザインの授業づくり 特別支援教育の視点から)	
	(3) 積極的な児童指導の取組	
III	今後の課題	9

不登校・いじめ等への対応や予防の充実に向けて ～笑顔のある学校・学級づくりを目指して～

提案者 那須町立高久小学校教諭 石倉 史郎

I 提案趣旨

現在、学校における児童指導上の諸問題は、基本的な生活習慣に関わる日常的な問題から暴力行為、いじめ、不登校といった問題行動等に至るまで多岐にわたり、依然として憂慮すべき状況にある。幸い、本校では今のところ暴力行為といった大きな問題は発生していないが、いじめ・不登校等の問題は少なからず抱えているのが実情である。

2013年には「いじめ防止対策推進法」が施行され、各学校においても「いじめ防止基本方針」の策定が義務づけられた。さらに栃木県では集団の中で学ぶという学校教育の特質を生かして、それぞれの学級を「学びに向かう集団」に高めながら、児童が自らの力で様々な不適応を解消し意欲的に取り組めるよう指導・援助していく「学業指導」を推進している。この学業指導を推し進めると共に、積極的な児童指導の取組を通して笑顔のある学校・学級づくりを目指していくことで、不登校・いじめ等の未然の防止につながるものと考えた。

そこで、不登校・いじめ等への対応や未然防止の取組等について本校の実践を提案したい。

II 提案内容

1 実践の概要

(1) 本校の実態と課題

本校は、観光地としても名を知られた那須街道沿いに位置し、山や川など自然豊かな地域にある。また、市町の境に位置しているので、数分で市街地に出ることできる、児童数105名の小規模校である。

このような環境で育った子ども達は、学習面では与えられた課題に対しては比較的まじめに物事に取り組むことができるが、反面、自ら考えて行動しようとする意識は低い。また、クラス替えのない環境で、個人に対する固定観念ができあがってしまい、自分の考えを伝えなくても何となく分かり合えている気持ちになってしまう状況にある。意見を言える子が固定化し、意見を言わないことが当たり前となっている児童も多い。

児童指導面では、幸い、本校では今のところ暴力行為といった大きな問題は発生していないが、例年いじめ・不登校等の問題は少なからず抱えているのが実情である。今年度は今のところ、いじめや不登校などは起きていないが、いじめにつながりかねない小さなトラブルはあり、不登校・いじめ等への対応や未然防止の取組を今後も継続して行っていく必要がある。

2 実践内容

(1) 学びに向かう集団（学級）づくりの工夫

ア 学級目標の設定

帰属意識の高い望ましい集団活動の条件は次のようなものが考えられる。

- ア 活動の目標を全員でつくり、その目標について全員が共通の理解をもっていること。
- イ 活動の目標を達成するための方法や手段などを全員で考え、話し合い、それを協力して実践できること。
- ウ 一人一人が役割を分担し、その役割を全員が共通に理解し、自分の役割や責任を果たすとともに、活動の目標について振り返り、生かすことができること。
- エ 一人一人の自発的な思いや願いが尊重され、互いの心理的な結び付きが強いこと。
- オ 成員相互の間に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識があること。
- カ 集団の中で、互いのよさを認め合うことができ、自由な意見交換や相互の関係が助長されるようになっていること。

『小学校学習指導要領解説 特別活動編P. 9』平成20年8月文科省

その活動の展開においては、一人一人の願いが尊重され、互いの心理的な結び付きが強まるようにしていくことも大切である。さらに、集団内での自由な相互交渉が助長されるように配慮することも大切になってくる。

そこで、本校の学校教育目標に迫るために、また、望ましい集団活動の条件から考えても、発達段階に応じた教師の願いと児童の願いの接点である「学級目標」づくりが重要なポイントであると考えた。

下の表は今年度の各学年ごとの学級目標である。

学 年	学 級 目 標
1 年	きまりをまもって なかよしクラス 17名＋1
2 年	あかるくて たのしい クラス 18名＋1
3 年	友だち思いで プラス1ができる え顔あふれるクラス 17名
4 年	ありがとうを大切に 明るい笑顔で助け合う けじめのあるクラス 24名
5 年	何事にも挑戦するクラス 11名
6 年	最高学年としての自覚をもち 最後まであきらめずに頑張る笑顔あふれる最強クラス 18名＋1

イ hyper-Q Uによるクラス及び個人の現状把握と活用

Q U は、河村茂雄先生が考案した調査であり、「Questionnaire-Utilities」（楽しい学校生活を送るためのアンケート）を略して「Q U」と呼ばれている。子ども達の学校生活での満足度と意欲、学級集団の状態を調べる質問紙であり、また、「活用しないことには意味がない」という思いを込め「Utilities」（効用・有用・役に立つ）としている。

下に示した①②の2つのアンケートから構成されており、一人一人の子ども理解や、学級集団の状態把握、学級経営に役立てることができる。

① 「いごちのよいクラスにするためのアンケート（学級満足度尺度）」

② 「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート（学校生活意欲尺度）」

本校では、5月に第1回目のhyper-Q Uを行い、毎年夏休み前に事例検討及び研修会を実施している。また、12月には第2回目のQ Uを実施し、1回目との比較検討を行い、学級経営における評価と改善に役立てている。

ウ 人間関係プログラムの取組

人間関係プログラムとは、那須町で行っている構成的グループエンカウンターとソーシャルスキルトレーニングのことである。エンカウンターとは、「本音の交流」「心と心のふれあい」という意味であり、エクササイズを通して、人間関係を円滑にすることを目的とする体験学習の一つであることから、「人間関係づくりの体験学習」ともいわれている。各種のエクササイズを遂行しながら、心と心のふれあいを深め、自己の成長を図ることをねらいとしている。

本校では、この人間関係プログラムの構成的グループエンカウンター（S G E）やソーシャルスキルトレーニング（S S T）を通して、自信や自己有用感を高めたり、他者とのコミュニケーションに必要な具体的なスキルを学んだりすることによって、適切なかかわり方ができるようにすることをねらいとし、学級活動の年間指導計画に組み込み、年間8時間の実践を行っている。

エ 芭蕉っ子班活動（異年齢集団）による交流遊びの取組（全6班）

本校では、「芭蕉っ子班活動」と「縦割り班清掃」を通して、高学年については下学年への思いやりや高学年としてのリーダーシップを育てたり、下学年については上学年へのあこがれを育んだりするなど、異年齢による交流活動を意図的・計画的に実践し効果的な展開を図っている。

遊びは本来、子ども達の自発的な行為である。これを意図的に組織し、教育的な効果をねらったのが「芭蕉っ子班活動」である。つまり、1年生から6年生までを含めたメンバーでグループを構成し、異年齢集団で一緒に遊ばせることによって、以下のようなねらいを達成していこうとしたものである。

- ① 1年生から6年生までの子ども達が、学級や学年の枠を超えて新しい仲間関係をつくる。
- ② 1年生から6年生までの子ども達が、学年に応じ、それぞれの立場を理解する。
- ③ 自分たちの力で集団を動かし、活動を成し遂げていく力を身に付ける。
- ④ みんなが楽しく遊べる遊びをつくり出せるような創造性を身に付ける。

本校では、この「芭蕉っ子班活動」を独自の教育活動として教育課程に位置付けている。楽しく遊ぶという活動を通して、計画から実践、反省にいたるまでのすべてを子ども達自身の手で推し進めていける「芭蕉っ子班活動」は、子ども達に実践力を育成していく格好の場であり、また、子ども達が身に付けた実践力を発揮する上で、有効な場でもあるからである。

○ 児童の実態と「芭蕉っ子班活動」の教育的意義

【芭蕉っ子班活動で見られる児童の姿】

- ・ 6年生の児童が低学年児童に声をかけ、積極的にかかわる姿
- ・ なかよし遊びがあることが分かると、「やったー！」と笑顔でうれしそうに話す低学年の姿
- ・ 整列する際、列に並んでいる子に声をかけたり、「分かった？」と聞いて教えたりする姿
- ・ 1年生に「がんばれ」と励ます高学年の姿や低学年に手加減をしたり気配りしたりする姿
- ・ 6年生が自然に遊びを盛り上げようと声をかける姿

児童は、「芭蕉っ子班活動」に参加することによって、低学年の児童の面倒をみたり、より高い目標をもって様々な役割を担う体験をしたりする。そして、困難を超えて目標を達成できるようにしたり互いが認め合えるようにしたりして、自分への自信がもてるようになる。したがって、芭蕉っ子班活動には、以下のような教育的意義があると考えられる。

【芭蕉っ子班活動の教育的意義】

- ① 学級内だけでなく、学校内での人間関係を築くことに有効
- ② 多様な集団において一人一人の児童が実践力を発揮する場として有効
- ③ 高学年が低学年への思いやりをもったり、リーダー性を育て、自分に自信をもてるようにしたりするために有効（人を楽しませる喜び）
- ④ 低学年が日常的に高学年にあこがれをもてるようにするために有効
- ⑤ 継続して活動することで、高学年の成長を促し、自主性を生み出す場として有効

○ 「芭蕉っ子班活動」の実践

「芭蕉っ子班活動」は、年間5回、水曜日の昼休みの時間に位置付けている。子ども達は、自分が所属する遊びグループの集合場所へ集まり、6年生のリーダーの指示のもとに遊びを始める。夢中になって3年生を追いかける2年生、みんな

の動きに目を配りながら遊びを盛り上げようとする6年生。1年生から6年生までが遊びに没頭する。こんなグループが、校内のあらゆる空間に広がり、まさに所せましと遊びの輪が広がる。これが本校における「芭蕉っ子班活動」の姿である。

(2) 子どもが意欲的に取り組む授業づくり教室環境づくりの工夫（≒ユニバーサルデザインの授業づくり 特別支援教育の視点から）

現行学習指導要領の理念は、「生きる力」の育成である。その中で「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」等が重視されている。これらの確かな学力は日々の授業で培われる力である。まさに今、その力を付けていくための授業の構築が求められている。一方、文部科学省の調査（平成24年度）によれば、小・中学校には、知的発達の遅れはないものの通常の学級における特別な教育的支援を必要とする児童生徒が約6.5%いるという結果が出されている。

このように配慮を必要としている子どもも含めて、どの子にも「分かりやすい授業・学びやすい授業」を行うことが重要であり、昨今、それを具現化する理論として「ユニバーサルデザインの授業」が普及しつつある。学業指導における子どもが意欲的に取り組む授業づくりは、このユニバーサルデザインの授業づくりとほぼ同義であると捉えることで、授業力の向上や子ども達全員に「分かった・できた」と実感させ、学力向上や子どもが意欲的に取り組む授業づくりにつながると期待できる。そこで、ユニバーサルデザインの授業を展開し、日常化につなげるために、現在取り組んでいる。

ア ノート指導と板書の画像データの蓄積

昨年度の本校の学校課題は「主体的に学び、自分の思いや考えを伝え合う子どもの育成～授業での学びと家庭学習をつなぐノート指導～」と設定し、研究を行った。めあての提示や工夫、振り返り活動の徹底、板書やノート指導のやり方を全学年で統一することで、学習の流れの基本を確立することができた。めあてや振り返り活動の定着、本時の学習を家庭学習につなげる流れもできつつある。

【ノート指導における指導項目】

- ・学習の流れが分かる板書、ノートの書き方
- ・ノートの書き方の統一（線を定規で引く、めあて・振り返りのマークなど）
- ・板書のチョークの色の使い分け…教師間で見せ合う

イ 「対話的」な授業の実践

昨年度の研究の結果、課題も明らかになってきた。素直に真面目に学習をする態度は身に付いたが、それは受動的な姿勢である。問題や困難を自ら切り拓いていくためには、主体的な動きが必要である。子ども達の考えを引き出し、子ども達自身が発言をつないでいくような、「対話的」な授業を実践していくことが必

要であると考えた。「対話的」な授業により、児童が主体的に課題を捉えたり、考えを深めたり、広げたりできるのではないかと考える。全国学力学習状況調査のB問題等、思考力を問われる問題は、苦手意識が先に立ち、無回答率が高くなる傾向にある。少し難しいと感じる問題に果敢に立ち向かう姿勢を、日頃の授業で訓練していく必要がある。

そこで、今年度は昨年度の研究の流れを継いで、「主体的に学び」に焦点を当て、「対話的」な授業実践について研究を深めている。

【「対話的」な授業の実践】

- ・発言をつなぐ教師の役割
- ・子ども達の発言が相互につながる言葉の吟味
- ・よりよい考えを創造していく話し合い

ウ 構造化の工夫

構造化は、そこに関わる要素間の関係性を明らかにして、全体の仕組み（構造）を分かりやすくすることであり、構造化には次のようなものが考えられる。

- ・場の構造化 … 教室が整理・整頓され、決められた場所に決められた物があるようにするために、学校全体で共通化を図る。物が機能的かつ、整然と置かれることで、落ち着いた雰囲気を出すことにより学習に向かうことができる。
- ・時間の構造化 … 時間をスケジュールやタイムタイマーで視覚化することで、安心感や見通しをもつことができることにより自分の気持ちをコントロールしやすくしている。
- ・展開の構造化 … 授業展開を明確に、しかも効果的にする工夫であり、授業全体が論理的な構造になっていることが必要である。また、展開を各授業ごとにルーティン化することで安心して学習に臨むことができる。

エ 焦点化の工夫（授業のめあて・ねらい）

単元全体及び本時の授業のねらいを明確にするということを特に大切にして取り組んでいる。この単位では何の力を身に付けさせるのか、本時は何をねらうのかをはっきりと提示するようにした。さらに、子どもに提示するときには、何ができたらよいのか、何が分かればよいのかを具体的にイメージできる文言で表し、ゴールを明確にすることで、自信をもって授業に参加させることを意識して行っている。

オ 共有化の工夫

子ども同士の練り合い、グループワークについても授業の中に毎回組み込むこととした。学年や教科に応じてやり方は異なるが、隣同士で考えや答えを確認し合うペア学習や、考えを練り合ったり、共同で作業をしたりするなどのグループ

学習の取組を行うことで、考えを深めたりコミュニケーション能力を育んだりすることをねらっている。

カ ICTの活用（タブレット・電子黒板・デジタル教科書等）

那須町では、ICT推進校に指定されている本校に昨年度30台のLTEモデルのタブレットと電子黒板・デジタル教科書が一部導入された。タブレットでは、授業支援アプリ「ロイロノート・スクール」などをインストールして授業で活用している。

「ロイロノート・スクール」を活用することで児童は「ロイロノート・スクール」のカメラ機能で静止画や動画を撮影し、気付いたことはメモすることもできる。アプリを起動すると写真や動画、メモはカードとして表示されており、児童はカードを整理し、必要なカードをつなげるだけで発表資料を完成させることができる。

「ロイロノート・スクール」のよさは何といっても直感的な操作性であり、シンプルな操作によって発表資料を素早く作成して「どう伝えるか」を考えることに集中できる。

○ ICTによる効果・影響

【児童の意識】

- ・「楽しく学習できた」「分かりやすい」「タブレットを使って発表したい」「自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができた」など意欲の向上はもちんのこと、「考える力」「伝える力」が向上してきている。

【児童のICT活用スキル】

- ・タブレット等の操作・活用スキルは確実に向上している。

【教員の意識】

- ・ICTを活用した授業は児童の「意欲を高めること」「理解を高めること」「思考を深めたり広げたりすること」「表現や技能を高めること」に効果的であると評価している。

(3) 積極的な児童指導の取組

ア あいさつ運動（A－1グランプリ）の取組

昨年度後期から毎月第2週目を原則に、あいさつ運動（A－1グランプリ）を行っている。本来競い合うことではないのかもしれないが、登校班対抗で毎月ごとにテーマを決め、グランプリや準グランプリ、レベルアップ賞、個人賞等月末に表彰を行っている。教員側の働きかけはもちろんあるが、現在は本校代表委員会を中心に「栃木県で一番あいさつができる学校」を目指して取り組んでいる。

基本的な生活習慣としてのあいさつが未熟であったからこそ生まれた取組ではあるが、レベルアップするたびに教職員や友だちから称賛される機会が増えることにつながっている。

【A－1 グランプリの月ごとのテーマ】

4 月	自分から進んで元気よく！
5 月	相手の目を見て、にこやかに！
6 月	会釈をしてあいさつしよう！

イ 教育相談、いじめアンケート等の取組

本校の教育相談は、自他の違いを理解し、集団生活におけるよりよい人間関係作りをするため、また、児童それぞれがもつ能力や適正を発見し、様々な場面で発揮していく事ができるような集団作りを目指して行っている。

また、教育上起こる諸問題について、教育相談的援助・指導を行う事により、児童の健全育成を図り、いじめの未然防止及び早期発見につながるよう行っている。

そして最終的に、児童一人一人がもつ「安全・安心」「所属・愛情」「自尊・承認」等の欲求を満たす学校・学級づくりをするための支援の場として行っている。

【相談活動の内容と実施月】

①集団づくり活動（4月、10月、1月）

- ・学級における人間関係の深まりや社会性のスキルを身に付けることをねらいとする。全員が参加でき、変化を感じ、それを振り返れるような活動を教師が計画し行う。

（構成的グルーペンカウンター等を積極的に取り入れる。）

②Q Uの実施（5月、12月）

- ・年間2回実施する。
- ・調査・分析まで業者に依頼し、Q U結果及び児童の実態の理解を深めるために現職教育で研修会を6月と1月に実施する。

③アンケート調査（6月、9月、11月、1月）

- ・年間4回児童の実態調査を行い、問題の早期発見に努める。

④教育相談週間（7月、11月、2月）

- ・学級担任による教育相談活動
- ・実施日や時間を設定し、それを児童に事前に伝え児童の時間を大切にする。
- ・問題があると思われる場合については、他の職員と連携したり、全体に共通理解を図るなどし一人で抱え込まない。
- ・第1回目（7月）及び第2回目（11月）については、Q Uを活用した児童全員を対象とする相談活動とし、第3回目「誰でも教育相談」については、児童が希望する職員との相談活動もしくは教師の立場から必要と思われる児童に対して行う相談活動とする。

Ⅲ 今後の課題

今後も本校で行っている「学業指導」を推し進めると共に、積極的な児童指導の取組を通して笑顔のある学校・学級づくりを目指していくことで、不登校・いじめ等の未然の防止につながるものと考えている。そして、そのためには、組織としてどこに向かって進むのか、あるべき姿は何なのか、方向性を示し、情報の共有を図ることで、ビジョンや理念のベクトルを合わせることが重要であると考えます。つまりは教職員間の協働性・同僚性を高めていくことがとても大事である。また、私自身を含め、教員個々の授業力や教育相談スキル等の向上を今後も一層図っていくことが大切であると感じている。さらに、家庭・地域との連携を密に取り、信頼関係を図っていくことで、子どもにとっても、家庭・地域にとっても魅力的で笑顔のあふれる学校・学級になれるのではないかと確信している。そのために、今後も継続して努力していきたい。